

位置と環境

遺跡は、市街地より北へ約4km離れた西祓川町井ノ上にある。市街地の北部は大笥柄岳を中心とする標高約1,000mを超える大隅半島最高峰の山々が連なっている。その裾野には広大なシラス台地が開けて、台地を南流する肝属川の支流はこの山々を源とし、この河川の度重なる浸食を受けて、標高30m前後の舌状台地が形成されている。この台地を開削した段階で本墓が発見されたものである。

調査の経緯

農道整備が計画実施されたことに伴い、昭和25年の開削工事中に発見されたものである。当時工事関係者によると、数基の地下式横穴墓が存在したものとみられる。ほかには副葬品（短甲・冑・刀・鉄剣・成川様式の壺、土師器）も確認されている。

その後、昭和25年6月25日には、寺師見國・河口貞徳によって調査が実施された。

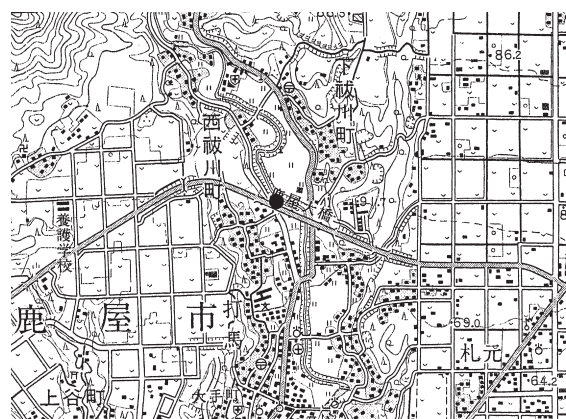
遺構と遺物

確認した遺構は台地の尾根を開削した切り通しの南側の崖面地表下170cmで土壌1か所が確認されている。確認された遺物の出土状況は判然としないが、短甲・冑・刀・剣については1か所から出土したものと考えられている。

短甲の規模は、高さ後胴50cm、前胴38cmを測り、形式は鉄製の横刃板鉾留短甲一領である。前胴の右脇に着用の際の開閉装置を持つ前胴開閉式となっている。右胴部の縁には、約3cm角の鍍金の施された蝶番金具が2か所見られる。

衝角付冑の規模は高さ14.5cm、内径縦24cm、横17cmを測る1個である。衝角部と頂部の伏板は1枚できているが、衝角部から先端にのびる鉄板は欠損している。また鉢の構造は腰巻、胴巻の鉄板と伏板との間に2段の地板を取り付けるという特徴を有することから古い形式であるとされ、後部には2段の鋳が残存している。

直刀は一振が確認された。刀身の長さ40cmで茎部を欠損している。



第1図 祓川地下式横穴墓の位置

出土した土器は、成川様式の特徴を有する壺形土器で、1点は外反する口縁部を持ち頸部に絡縄凸帯を有する細長い器形のもの、ほかに胴部に一列に刻んだ短い線を並列させた長頸壺がある。また、頸部の「く」の字形の屈曲部に刻目を施した平底の甕も確認された。遺跡の時期は副葬品等から見て5世紀末頃に相当するものと思われる。

特徴

蝶番金具に鍍金が施されている例は珍しく、鹿児島県内で見ることでできる古墳時代の甲冑の復元資料は本例だけである。

資料の所在

出土遺物の短甲・衝角付冑は、県指定有形文化財（考古）に指定され、鹿屋市教育委員会に保管されている。

参考文献

鹿児島県教育委員会1957「第四輯」『鹿児島県文化財調査報告書』

鹿児島県教育委員会1969「第十六集」『鹿児島県文化財調査報告書』

(山口俊博)



衝角付冑（左側面）

短甲（前胴）

写真1